

特集・20年のたたかい……④

■このスライドは、昨年の11月9日、三池大災害20周年裁判提訴10周年の抗議集会上で上映したものを紙上編集したものです。

「生命を守る」たたかいの発展と裁判闘争の勝利のために



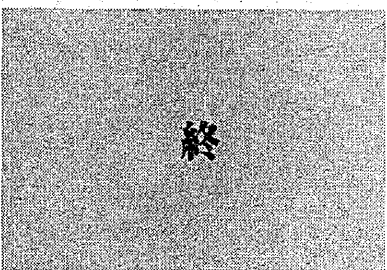
①7 10月14日、福岡地裁で51回目の口頭弁論があり、災害原因について政府調査団の一員だった荒木忍教授が証言、検察庁の不起訴について批判した。



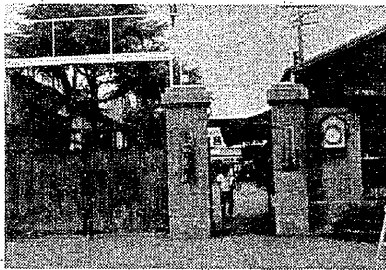
①8 あれから20年。三井の大罪は断じて消えることはない。その責任が明らかにされ、完全な補償と保安の確保のために裁判闘争の勝利へ向ってすすむ。



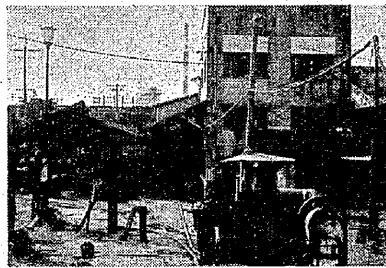
①9 三池の労働者のたたかいの歴史は、生活と権利を守る「合理化」とのたたかいだった。そして命をかけた炭鉱災害とのたたかいの歴史でもあった。そして、そのたたかいは続く。



①10 おわり



①1 何ともなかったかのような三川鉱。門を入ると「死亡災害ゼロ達成」という横断幕が目につく。



①2 現在の三川鉱第1斜坑附近。爆発さえなかったならば、岩粉を撒き、散水さえしておけば、炭じんを集積していなかったら、あの爆発はなかったのである。



①3 容易に防げる炭じん爆発。初歩的な対策をサポートした三井鉱山の責任は永久に消えることはない。



①4 今年は3年ごとの「協定」の改訂期。三井鉱山に誠意ある態度を示すよう、大牟田・荒尾両市長に要請。両市長は主旨は必ず伝えると約束した。



①5 「田中実刑判決」が下った10月12日、三川鉱正門前で「CO諸要求貫徹決起集会」を開き、座り込みに入った。

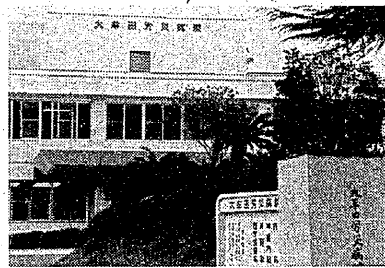


①6 交渉団、上京団もがんばった。しかし、いぜんとして三井鉱山は誠意を示さなかった。不満であったが、一応の協定が結ばれたのである。

錆落しなど。再生の仕事だが作業量を問われることはない。



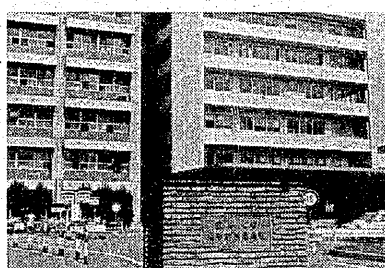
①6 大牟田労災病院附属の回復訓練所に通うCO患者は一応に、いまの病状と老いていく体のことを気使う。



①6 新しくなった大牟田労災病院。今のCO患者の入院者は34人。



①7 一般の労災患者との同居である。「動けるあいだはできるだけ体を動かすことに専念」する人たちだった。



①8 死んだ宮島青年がいた熊本大学附属病院。病状は変わらない。病院側は「症状が固定しているので退院したら」という。



①9 もう人体実験が済んだからというのだろうか。西田さんは相変わらず「敬礼」を見せてくれた。



①10 ベットで20年。CO中毒患者で最も重症の「失外とう症候群」で、植物人間に近い。献身的な看病をつづけた母親のミヨさんも今はない。無言の告発をつづける受川孝さんである。



①9 昭和39年に開設された三池縫製工場。古びた倉庫のような工場での勤務はきびしい。遺族も20年経った今、次々と定年退職でやめていく。



①10 定年退職したあとは月4万円から5万円ぐらいの遺族年金にすぎなくて生きていくよりほかにない。

アソニット工場も、いまでは遺族は少くなり、ほとんどが近郊の娘さんたちでしめられている。



①11 CO患者の職場復帰者のための造成職場、万田作業所の朝。いまだに病院に通う者もいる。病院に行っても回復しない。なおっていないのに労災は打ち切られたのである。



①12 軽度の作業ということで農園作業。雨の日は休みである。



①13 体に自信があっても会社は坑内に復帰させようとはしない。やはり不安なのである。「戦力」とは考えていないともいう。



①14 こちらは同じ造成職場の新港作業所。坑内で使う金物などの

三池大災害21周年抗議集会

とき 十一月九日(金) 午後一時三十分

ところ 大牟田市民会館

第一部 ドキュメント・スライド
「悲しみを怒りにかえて」

第二部 抗議集会